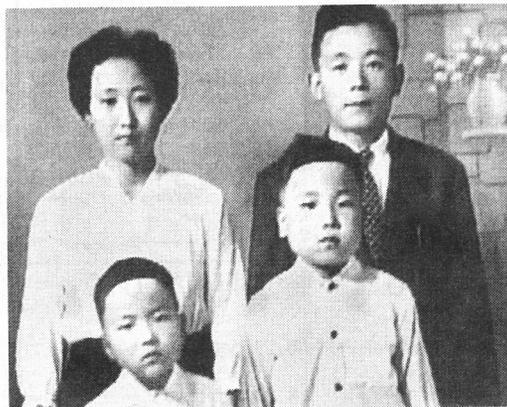




1950年8月、熊本市の熊本駅近くの「在日」の韓国・朝鮮人集落で生まれる。

東京に住んでいた両親が空襲で愛知県一宮市に疎開していたのですが、そこでも空襲がひどくなり、朝鮮半島への帰国を決意して、熊本市で日本の憲兵をしていた父の弟に別れを告げにきたところで終戦となりました。そのまま住み着いて、養豚やヤミのどぶろく造りで生計を立てている間に私が生まれたのです。みんな貧しかったし、共同体で大人は苦労したのですが、子どもの私は特に差別された記憶はないし、周囲はみんな優しくしたから、まあ幸せな時代でしたね。

日韓の絆を強める



5歳の頃、家族と（前列左が本人、右は兄の正男さん）

野球好きだった少年時代、一時はプロの夢も

早大進学で上京、漱石の「三四郎」に自分重ねる

「在日」に苦悩、日本名を捨てて人生リセット

になり始めたけれど、春の選抜高校野球大会で全国制覇したこともある熊本県立済々黌高校に進学。ショートで2番バッターとして活躍、末はプロ野球選手にと夢見ていました。母親が強く望んでいたし、当時は在日で東映フライヤーズで活躍していた張本勲選手の例もあったからです。しかし所詮、それほどの実力はないし、それならノン

プロの道をと模索しましたが、結局、野球から遠ざかっていった。70年に早稲田大学政治経済学部に進学しました。具体的な目標があったわけではありませんが、熊本でライバルだった選手が野球部で活躍していたこともあり、野球の強い早稲田に憧れがあったのかも。自分の境遇

が夏目漱石の小説「三四郎」にそっくりだと思ったのもこの頃です。三四郎も熊本から東京に出てくる。漱石は中学時代からの愛読書でしたが、熊本から東京に向かうブルートレインで「三四郎」を何度も読んで、作品に出てくるストレイシープ（迷える子羊）という言葉が自分のことのように思えて、東京に暮らすことに不安を

覚えたものです。熊本で教鞭（きょうべん）を執った漱石の作品には自分と重なることが多い。「吾輩は猫である」から「それから」「門」「草枕」などの作品を読んで、「悩む力」を学びました。私が専門に研究したドイツの社会学者マックス・ウェーバーとはほぼ同時代人で、思想も共通していることに驚きます。漱石については、現在の私の研究室が作品の舞台となる三四郎池のすぐそばというのも運命的なつながりを感じます。

約1カ月の滞在を終える頃になると、逆に日本に帰国するのが嫌になっていました。そんな時、ソウルの喫茶店に入ると、真っ赤な夕日が沈むのが窓から見えた。なぜか「俺は何を悩んでいるのだろう。悩む必要はないじゃないか」と感じました。「そうだ。人生をリセットするために名前を変えよう」と思い立ち、それまでの日本名「永野鉄男」を捨て、本名の「姜尚中」を名乗ろうと決意しました。以来、姜尚中で通していますが、家族や熊本時代の友人は「鉄男君」といまだに呼んでいるし、逆に最近では、鉄男にも愛着を感じるのが本音です。